

# 皮膚で感じる都市型美術館 —他者と共有するひとり空間の創出—

22119033 比護 遥  
指導教員 宮 晶子 教授

皮膚感覚	他者	都市
美術館	ひとり空間	領域

## 1. 背景と目的

美術館は、他者と空間を共有しながらもひとりになれる、都市の居場所である。美術館で作品鑑賞をするとき、私たちは日常の喧騒から離れ、展示空間の環境を含めて美術作品と対峙することでひとりの空間を形成する。ここで私たちは、公共空間の中で自己の触感を作用させて他者の存在を感じたうえで自分の領域を確保しているのだと考える (図 1)。

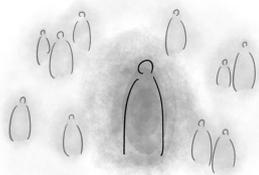


図 1 他者を感じる自己の境界

現代の都市において、身体スケールを遥かに超える高層の建物が立ち並び、人や車が忙しく行き交う中で、自己と他者は分断されていると同時に、他者の視線を気にして心地良くひとりになれないように感じる。このような不特定多数の他者が存在する都市で、触感で他者の存在を感じることで、心地良いひとり空間を実現できるのではないかと考える。

本制作では、美術鑑賞という行為によって周囲の人々を含む環境と対峙することで、他者と共存する都市の中での心地良さを目指した都市型美術館を提案する。

## 2. 美術鑑賞

絵画作品を鑑賞するとき、その絵画の周辺に広がる世界を想像する。フレームを越えてイメージの拡がりを与えられ、作品周辺の余白を埋めるように感覚が拡張される。つまり、作品鑑賞という行為は、作品そのものとその周辺環境、他者の存在を感じ取ったうえで個人が作品と対峙することによって、ひとりの空間が確立されているのだといえる。

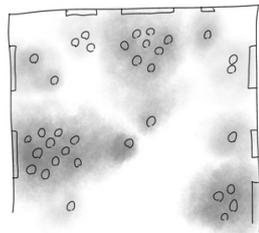


図 2 展示室内での作品との対峙

人々の忙しない時間が積層する都市の中でも、自然の中にいるときのようにひとりであることが充足感につな

がるような空間が、美術館の中にあるのではないかと考える。現代の都市生活の中に、そのような心地良いひとり空間の可能性を見出せる美術館が存在することで、都市に暮らす人々の心が満たされる機会を提供できるのだと考える。

## 3. 都市の中のひとり空間

都市の中では、家という内的な空間と比べ他者の目があり、社会の中に身を置くことで自己の存在をより強く認識し、自分に没入する「ひとり空間」を確立できる。南後由和氏は著書『ひとり空間の都市論』で、「ひとり空間」とは「あらゆる個人は都市生活の多様なあられのなかのどこかに、彼が羽を伸ばしてゆったりできる種類の環境を見いだす」ことだと述べている。混沌とした都市の中でひとりとしてふるまうには、他者や外部のものに依存せざるを得ないのである。

家と異なり、公共空間では他者との距離を自身で認識したうえで自己の領域、つまりパーソナルスペースをその場で形成する必要がある。壁などの安定したものの近くだと四方を気にかける必要がなく、空間が広がっている方面に対してのみ意識を向け自分の領域を作り出す (図 4)。つまり、「ひとり空間」の形成過程において、壁や柱といった安定した建築的要素があることで、安心感が得られる。

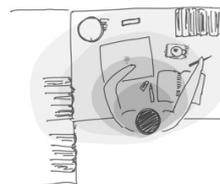


図 3 家での領域形成

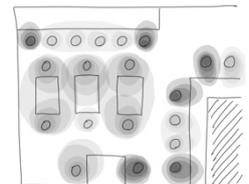


図 4 公共空間での領域形成

## 4. 皮膚感覚の伸縮

### 4-1. 境界としての皮膚

美術史研究者の若林雅哉氏は『現代の皮膚感覚をさぐる』において、「『身体』を輪郭づける境界としての皮膚は、受容者の眼差しの中で、前線を拡大したり、他の身体を包み込んだり、いわば『伸び縮み』するのではないのだろうか」と述べている。人は身体運動によって行為をし、皮膚という身体の内外の境界を変化させることで、

自分の存在とそれを守るための領域を確立している  
のである。この現象を、“皮膚感覚の伸縮”と呼ぶ。

#### 4-2. 都市における皮膚感覚

私たちは、自己の皮膚感覚を伸縮させて都市を経験しているのではないか。都市の中で「ひとり空間」を形成する過程において、自己と他者間で、自己の皮膚感覚を拡張させることで自分の内外の境界が皮膚自体から拡張し、領域が確立されると考える。

また都市において、高層ビルが建ち並ぶ大通りから路地に入るとき、瞬間的に皮膚感覚が収縮したのち、路地の道幅と自分の視界に合わせて皮膚感覚が拡張する。狭い路地では、自分の視覚で見えている範囲までを自分の領域だと認識する。つまり都市空間の経験には、常に皮膚感覚の伸縮が作用しているといえる。



写真 広場から路地に入る：皮膚感覚の変化

#### 5. 他者の存在を触感で知覚する

皮膚感覚を拡張させて他者の存在を感じる過程には、視覚、聴覚などを含む感覚も関与している。テクニカルによると、身体を通してモノを知覚することにおいて、触覚だけでなく視覚、聴覚、記憶などを含めた異種感覚を統合した主観的な感覚を「触感」としている。視覚や聴覚で他者を認識し、自身の経験からパーソナルスペースの範囲を潜在意識の中で設定する。このことから皮膚感覚の伸縮によって他者と空間を共有する過程において、触感で他者の気配を感じ、ひとり空間をつくり出しているのだと考える。

#### 6. 設計提案

##### 6-1. 敷地

敷地は中央区京橋のアーティゾン美術館のある場所を選定する。京橋は、日本橋と銀座に挟まれたオフィス街であり、この美術館は東京駅から延びる八重洲通りと中央通りの交わるところに位置する。都市型の美術館としてオフィスビルの中にあり、縦に層を連ねるようにして構成されている。高層ビルで床面積を得る現代都市において、美術館は均質な建物の一部として見なされてしまうのではないかと考える。

他者の存在が触感で感じられる美術館では、都市の中でも身体的な距離で人と向き合うべきだと考え、このビルの中に収められたアーティゾン美術館をモデルにし、新たな都市型美術館のあり方を再考する。

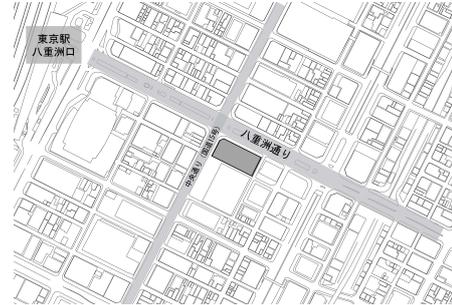


図5 敷地周辺地図

##### 6-2. 設計手法

他者と空間を共有していることを皮膚で感じられる要素を用いて空間を構成する。美術鑑賞というひとり空間が形成される行為の合間に、ひとりでの休憩や他者との積極的な交流を同時に実現するロビー空間を設ける。美術館を訪れる主目的である作品鑑賞の間にできた余白によって、空間とそれに伴う行為の変化が自身の皮膚感覚を作用させて他者との関わり合いや多様な動線を誘発する。また、中間階を設けフロアを微妙にずらすことで、スラブや壁による視界の遮断が生じ、空間を通して他者を感じる。吹き抜けを介した向こう側に、同じように都市と美術館を経験する他者を見ることで、自己の皮膚感覚が拡張され、他者の存在と自己の感覚をより意識する。スキップフロアを配置し既存の梁が突き出ることにより天井の高低差を身体で感じることで、美術鑑賞とロビーの空間的な緩急が皮膚感覚を伸縮させることで、ひとり空間と他者との空間を往復する経験をつくり出す。(図 6, 7)

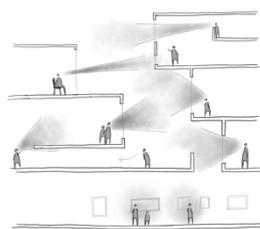


図6 フロアのずれ

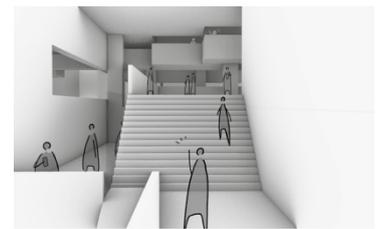


図7 天井の高低差による感覚の伸縮

このように、ビルの中に収められた都市型美術館で、他者の存在を皮膚感覚で知覚し、作品鑑賞によるひとり空間を形成することで、都市の中において心が満たされていくことを期待する。

##### 主要参考文献

- (1) 南後由和：『ひとり空間の都市論』、筑摩書房、2018
- (2) 若林雅哉：「皮膚と時間」、平芳幸浩：『現代の皮膚感覚をさぐる』、春風社、2023、pp55-81
- (3) ユハニ・パツラスマー：『建築と触覚』、草思社、2022
- (4) 仲谷正史 / 寛康明 / 白土寛和：『触感をつくる』、岩波書店、2011